

カエル・カマキリ・アゲハ 江戸川双葉幼稚園(東京都江戸川区)

真冬に見つけたバッタを思いやりかわる子どもたちの姿に打たれ、ビオトープを改造して蛭のいるビオトープを目指して様々な試みを始めました。(実践事例集vol.1.3参照) 子どもたちは、日々自然とのかかわりの中で心を動かし、不思議や疑問を感じ、気付いたり考えたり感動したりしたことを共有していることが分かる事例を紹介します。

<カエルを求めて>

連休明けの園庭。日陰に置かれた大きなたらいが、真っ黒に見えるくらいにたくさんのオタマジャクシ！ 蚊や害虫を食べてくれることを願って、あちこちから捕ってきたオタマジャクシたち。



「うわー、オタマジャクシだ！」

「ちいさい！」

「こんなにいっぱい！」

「足のあるものいるねー」

「どうするの？こんなに！」

「アマガエルになる？」

「うーん」

取り囲んだみんなが、あれや



これや推測する中、虫博士のKくんが一言。

「小さいオタマジャクシは大きいカエルに、小さいカエルは、大きいオタマジャクシなんだ！」と、図鑑を示す。ちょっと見たところ、みんな同じように見えるオタマジャクシ。大きなたらいいっぱいじゃうじゃ集まったオタマジャクシ。科学絵本や、図鑑と首っ引きで「これは、ヒキガエルになると思うよ」「ここには、アマガエルはいない」ということになったが、しばらく毎日、オタマジャクシの変化・生長を観察する日々になった。後ろ足が出て、前足が出て、尾が無くなって、這い上がってくるようになったと思うと、いつの間にか園庭に消えてしまった。

連日、エサとして入れた野菜(おひたしなど)に吸い付くようにして食べているオタマジャクシをじっと見つめて、飽きない子どもたち。水替えやエサやりなど、誰からともなく面倒を見ることのできる子どもたちに感心する。それにしても、オタマジャクシを手にとり、じっとその顔を見ては、他のものと見比べたり、図鑑と見比べたり、違いを見つかったり、かすかな色や模様の違いに気づく子どもたちの姿はまさに小さな科学者だった。

<カマキリの卵囊が消えてしまった！>

植物たちの水やりをしようと思って、ハーブ園を見ると、目を疑うような光景。何と、ないのだ、カマキリの卵囊が！何本もの葎の先についた卵囊がゾロリと並んで、今か今かと孵化を待っている日々だったのが、驚くような枯れ枝だけの光景となってしまった。枝だけは並んでいるが、その枝先から、卵だけが、なくなっている。一体何事が！？卵だけが見事に持って行かれた。こんなことは初めて！一体誰が？



こんなことのできるのは、上から様子を見ていて、遠足で誰もいない静かな園庭を我が物顔に、したい放題を尽くしたカラス以外にないだろう。桑の木もがさがさと乱れ、ザリガニもいなくなっている！もし、猫なら、きっと水槽がひっくり返ったり、きれいにザリガニだけがないということにはならないだろう。カマキリの卵囊とザリガニ、犯人はカラスに違いない。頭を抱え、話し合う大人たちの様子に、「そうだよ、カラスだよ、きっと。だって、この間も、カラスがSちゃんのピン止め、狙ってたもん」と、つい数日前の出来事を証言するのはI。

1週間ほど前、少し暖かくなってきたかなと思われた朝、ゾロゾロと、小さな赤ちゃんカマキリが誕生していた。それがせめてもの救いであった。この時は、まだまだこれから何回もこんな経験ができるから、と安心しきっていたのだが、これっきりとなってしまった。また、残念ながら生まれ出た瞬間というより、

もうほとんどの赤ちゃんカマキリたちが、四方八方に散って行くところだったが、今にしてみれば、[子どもたちもみんなで見られて本当に良かった]と思う。自然相手のことは、本当に難しい。

ハーブ園のそこここで、時折、小さな赤ちゃんカマキリを見るので、彼らが、立派に育って、しっかりと園庭を守ってくれることを期待する私たちである。

(考察)

クロアゲハ、アオスジアゲハ、アゲハなどチョウの仲間や、カイコ、そして、今年初めてのホタルと、卵から幼虫が生まれ(孵化し)、幼虫が何回か脱皮を繰り返して大きくなり、蛹になり、そして、羽化し、成虫になる生き物たちを何種類も、何匹も飼育しているので、子どもたちは、その変化・生長を繰り返し観察し、体験してくる。カマキリは、昨年産みつけられた卵の入った卵囊から、直接、親と同じ姿をしたカマキリの赤ちゃんが生まれてくる。これも、何度も見る機会を与えたいと願っている。それは、やがて学ぶことになる完全変態と不完全変態の、その違い・その中身をしっかりと体に蓄えさせておきたいと願っているからである。

園庭で生まれ、育ち、生き残ったカマキリが園庭の茂みで産卵する場面に遭遇することのできた年もあるが、それはなかなか難しいので、冬の間枯れ野で卵囊を探してくるのである。園児のご家庭でも、それを念頭に置き、見つけては届けて下さるので、7~8個の卵囊が順次孵化し、子どもたちが目を見張って、その赤ちゃんカマキリたちが一人旅に出るのを見送るのである。「お母さんは?」「一人ぼっちなの?」さまざまな生から、子どもたちはたくさんのかんじ、たくさんのかんじを学ぶ。いのちをいとおしむ思い、小さな生き物たちに対する優しさ、互いを重んじる温かなかわりなど、こうした豊富な経験から生まれてくるだろう、と思う。

この日のカマキリの卵囊は、多分、孵化寸前だったのだろう。そしてカラスにとっては、いわば、食べごろだったということなのだろう。自然の智恵には、かなわない。

<アゲハが生まれた!>

「チョウチョ、生まれてるよ!」「アゲハ、生まれてる!」

と朝一番に登園し、第一発見者になる意欲満々のH児。今年初めてのアゲハチョウの誕生を迎えた。蛹になってから、ちょうど2週間。蛹から出る瞬間に立ち会えなかったのはとても残念だけれど、まだ、羽根の伸びきっていない生まれたてのアゲハを目の当たりにして、感動が走る。生まれて初めてこんな光景を見た教育実習生たちは、子どもたちと共に心を躍らせ、「私も生まれたてのアゲハや、サナギ、幼虫を近くで見たのは初めてだったので、子どもたちと共に心を躍らせ、いつまでも見ていたかった」と語った。

H児は、「朝、生まれただけで、ここでは、狭くてかわいそうだから、お空に放してあげるんだ。もっと、広いところで飛びたそうだもんね。もうさよならなんだ!」と言った。

(考察)

子どもたちは、張り付くようにしてよく飼育槽を見ている。そして、好奇心旺盛にあれやこれやと目ざとく発見する。中の幼虫が脱皮しているとか、蛹の色が変わったなどの変化に鋭く気づき、「あしたは、一番に行こう、そして見つけよう」などと、心に決めているようだ。お母さんを急かせて一番に登園し、「見て、やっば、アゲハ、生まれてる!」などと、自分の予測が的中した喜びと、チョウの羽化に立ち会えた感激と満足感と、第一発見者になった誇りなどを感じ、その日の生活を意欲的にプランニングしている。

それにしても、「色、変わってきたよ」「ほら、羽の色、見えるでしょう。もうすぐだよ」などと会話が交わされ、同年代だけでなく小さい組の子たちへとその経験や知識が分かち合われ、集団としての知識、集団的知性へと受け継がれているのは、とても大事なことだと思し、これからもこうした機会を大事に育くめるような園生活を確保してゆきたいと思う。

みどころ

都市型の幼稚園でも、自然環境に恵まれた幼稚園でも、子どもたちは、「自分たちにとって身近な自然」に心を動かし、考えたり想像したりしているのではないのでしょうか。「身近な自然を感じる心」「不思議や疑問を追究する意欲」「感じたことを確かめたり、共感し合ったりする態度」が育まれていくような環境が大切なことが分かります。そして、同じように心を動かし、考え合い、情報を共有し、共感し合える仲間の存在も重要であることが、この事例から伝わってきます。